

# 広報市民レポーターだより ⑦

## 働く婦人の家を訪ねて

女の館 働く婦人の家。名前に「働く」がついているので、家庭の主婦は利用できないように感じられ一瞬戸惑いましたが、主婦も家庭で働いているのだと思っただけで気が楽になりました。会館はカルチャーセンターが婦人の人格形成の場合、訪問してみました。

### 婦人会館まつりの日に

第七回郷土品まつりの協賛行事として「婦人会館まつり」が、十一月一日と二日開かれ、大ぜいの人たちでにぎわっていました。リホーム洋裁や編み物、七宝焼



「婦人のつどい」では、老後の生活について切実な問題が次々に出されました。

—広報市民レポーター 兎沢君子(白沢)—

### 婦人のつどい I

十月十五日、同会館で「婦人のつどい」があり、私も参加させていただきました。

参加したのは、子育てを終えた五十五歳以上の方たちで、現在の自分を見つめ、これからどう生きるか——老後の生活を中心に話しあわれました。

Aさん「私は、体を動かして健康を保つこと、何か社会に奉仕できることをする、夫と同じ趣味を持つように努力し、毎日を楽しく過ごすようにしている」

Bさん「停年退職した夫の社会参加の場が少なく、外へ出る機会がない。そのことが老いに拍車をかけていくのではないかと心配している」

Cさん「若くて夫を亡くした。子供を育てるだけでほかのことを考える余裕がなくなかった。皆さんの話は幸せな苦勞のように思えてうらやましい」

Dさん「年金だけでは生活が苦しい。年金も身近な問題として考えなければならぬ。」

### 婦人のつどい II

十一月十七日「高齢化に向う女性の生き方——どんな心構えでいらっしやいますか」をテーマに、二回目の婦人のつどいが開かれました。

Eさん「夫の老後は私がめんどうをみるが、自分が倒れたときは他家に嫁いだ娘の世話にならないで施設に入りたいと思う。」

Fさん「介護されるようになってきたときの心の準備をしているし、荷物の整理なども家族に知らせておいている」

Gさん「常日ごろから隣り近所にひと声をかけて生活している」などの話が出され、皆さんは老後についてしっかりと考えたをもっていることを知りました。

「毎日を楽しく過ごし長生きしたい」それはだれもが考えていることです。しかし現実には、病気や生活費、家族などの問題が山積し、自分一人だけではどうもならないことが多いのです。

最後まで人間らしく生きぬくためには、家族や地域社会がお互いに支えあい、助け合う社会をつくらねばならない、現実に耐える強い心を持つことが必要だと思います。また、核家族化、高齢化に対する福祉行政がしっかりと確立されなければ私たちの老後は暗いものになります。

男女雇用均等法が施行され、これを機に女性の地位が徐々に向上しつつあります。しかし現実には家庭、地域などでは、女性の立場はまだまだ低いのではないのでしょうか。

それがためにも、この女の館、婦人の家を単にカルチャーセンターとするだけではなく、女性を取り巻くさまざまな問題について、みんなで考える場として活用し、女性の地位向上のための拠点として大いに利用されることを望みます。

最後に、この婦人の家には、働く婦人や主婦を対象に、相談所が設けられています。家庭や職場、社会などにおけるさまざまな問題でお悩みの方はお気軽に相談してみてください。

#### 働く婦人の家

☎ 49-7028

〈相談所〉

とき・月曜日～金曜日

午前9時～午後3時

ところ・婦人会館相談室